

# クラーク室内管弦楽団 第35回演奏会

“第12回旅立つ人々に捧げる演奏会”

2015年3月13日(金) 19:15 開演

北海道クリスチャンセンター ホール(2F)

(札幌市北区北7条西6丁目 <<http://www.h3.dion.ne.jp/~hcc/>>)

入場無料

プログラム

M. ラヴェル (1875-1937)

『逝ける王女のためのパヴァーヌ』

W. A. モーツァルト (1756-1791)

ホルン協奏曲第3番変長調 K. 447  
(Hr. 独奏: 杉淵 玄)

G. H. ヘンデル (1685-1759)

『水上の音楽』第2組曲ニ長調 HWV349  
(Trp.: 増田和孝, 川上大智)

W. A. モーツァルト (1756-1791)

交響曲第40番ト短調 K. 550

指揮: 奥 聡 (メディア・コミュニケーション研究院)

お問い合わせ: 011-706-6595

(工学研究院・フロンティア化学教育研究センター 下川部雅英)

## プログラム・ノート

通信技術や移動手段が発達し世界が狭くなったと言われます。そのなかで、「国際性」や「普遍的共通性」と同時に、「地域性」や「多様性」も強く意識されるようになってきているかもしれません。西洋クラシック音楽の世界でも、時代や地域を越えて今日まで広く親しまれている作品の多くは、その地域性・文化性や作曲家の個性と同時に、何か人類普遍の魅力を備えているのかもしれません。

**ラヴェルの『逝ける王女のためのパヴァーヌ』**は、パリ音楽院在学中の1899年にピアノソロ曲として作曲され、ラヴェル自身により1910年に管弦楽用に編曲されています。ラヴェルはこの曲に関して「スペインの宮廷で幼い王女が踊るパヴァーヌ」で「葬送の哀歌」ではないと述べています。当時のフランス（特にラヴェル）には、古きよき時代のスペインへの憧れがあったようです。バッハにも「フランス風」「イタリア風」など音楽先進国の素材を利用したものや、モーツァルトのトルコ行進曲など、エキゾチックな「異国風」を題材にするなど、自らの音楽の中に、多様性を組み込んでいく志向が少なくなかったようです。

**ヘンデルの『水上の音楽』**は、完全な手書きのスコアが残っていないため、詳細が不明な点も少なくないようですが、1715年、1717年、1736年にテムズ川で行われた「水上宴会」のために作曲されたようで、今日では22曲が3つの組曲としてまとめられています。音楽のスタイルは、コレルリ風の合奏協奏曲（イタリア風）の枠組みに、バロックダンスの特徴（フランス風）を組み込み、さらにパーセルなどの管楽器音楽の要素（イギリス風）も上手に融合させた、当時としてはまさに国際的な色彩の強い楽曲に仕上がっています。今日でも広く愛されているゆえんかもしれません。本日は第一組曲の中から1曲、続いて第二組曲（5曲）を演奏します。華やかで楽しい水上パーティの様子が、目に浮かぶでしょうか。

脚本家が特定の役者を想定して書くことを「あて書き」と言うそうですが、クラシック音楽の協奏曲は（今日でも）特定のソリストを想定して作曲されることが多いようです。特に、管楽器をソロとする場合、（当時の楽器の性能のことも含めて）使える音域をその奏者に合わせて作曲します。

**モーツァルトのホルン協奏曲第3番（K. 447）**は、友人である名手ロイトゲープのために書かれたと考えられています。「隣の友だち」のために書いたと言う点では、究極のローカル作品と言えますが、それが今日まで世界中で演奏され続けているというところに、モーツァルト音楽の持つ普遍性が示されていると思われます。この第3番は、モーツァルトの4つのホルン協奏曲の中で、もっとも内容が充実していると言われるのですが、オーケストラパートにホルンがなく、クラリネットが利用されているという点が、モーツァルトの他の協奏曲と比べて、大変ユニークな特徴となっています。

モーツァルトの番号がついている41の交響曲の中で「短調」で書かれているものは2曲しかありません。本日演奏する「ト短調」**交響曲第40番（K. 550）**と第25番（K. 183）です。1788年の夏の短い期間にモーツァルトは最後の3つの交響曲を集中的に書いていますが、何のために書かれ、初演がいつであったのかを示す明確な証拠は残っていません。現代の我々はうっかりすると忘れてしまうことですが、ケッヘル番号が最初からついていただけでもなく、交響曲「第\*番」という数字がつけられていたわけでもありません。当時のプログラムビラに「モーツァルト氏の新作交響曲」とだけ書かれているものがいくつ残っており、そのような資料から初演の月日が推測されます。この最後の3つの交響曲は、モーツァルトの持つ時代性や地域性を大きく越えた普遍的な力がいっそう強く感じられるもので、モーツァルト自身にとっても、次の新しい段階への「旅立ち」を象徴しているようにも思えます。

今宵の演奏会は、クラーク室内管弦楽団と一緒に演奏してきた仲間の旅立ちを祝う会なのですが、4月から新しい世界へ進んでゆく多くのみなさまに対する「贈る言葉」となるような普遍性を備えていれば、とささやかな（無謀な？）希望も持っています。別れと旅立ちの季節。不安と希望を胸に、新しい一歩を踏み出す人々に、明るい春の陽がそそぎますように。（メディア・コミュニケーション研究院 奥 聡）